

建築家・葛西萬司の自邸にみる建築的特徴に関する一考察

A study on architectural features of Manji Kasai's private houses

○安樂駿作¹, 大川三雄²

*Shunsaku Anraku¹, Mitsuo Ohkawa²

Abstract: This paper studied architect Manji Kasai's private houses. He designed 4 houses in his life. These houses have the common concept. Semi Western style, family house, Low price, total design. These common points are similar the movement of house improvement in Japan. Specially he prefer Japanese style to outward appearance. And he published these houses on various magazines. He educated the new life style for the general public.

1. はじめに

かさい まんじ (1863-1942) たつの きんご (1854-1919)

葛西萬司は辰野金吾と共に辰野葛西事務所を経営し、明治から大正中頃まで日本の近代建築の基礎を築いた建築家である。葛西は辰野よりも若い建築家であり、昭和戦前まで設計活動を続けているが、その評価は辰野葛西事務所以降も含め少ない。遺族へのインタビューなどの調査も行われている^{*1}が、葛西自身が自らの業績を家族に話し、残すことに消極的であったこともあり、葛西の設計活動は明らかになっていない。

葛西は自邸を生涯で4作設計しているが、没後に建築系雑誌に掲載された作品一覧にないもの^{*2}である。最初の自邸は麴町区三年町（現：千代田区霞が関）に1911[M44]年竣工。竣工翌年焼失し、ほぼ同じ形で再建（以下2作含め三年町の自邸）された自邸。1920[T9]年に竣工した岩手県盛岡市の葛西家の本邸に建築された洋館。1927[S2]年頃竣工の北区中里の自邸（以下中里の自邸）の4作品である。

本稿では自邸の建築的特徴を明らかにした上で葛西の住宅観を考察する。また葛西自邸が当時の雑誌や展覧会において注目された存在であったことを明らかにすることを目的とする。

なお、図面資料と写真資料は葛西肇氏所蔵の資料と盛岡市先人記念館の資料を用いた。

2. 建築的特徴

2-1. 和洋折衷とローコスト住宅

葛西の最初の自邸である三年町の自邸の外観は真壁造りとし、間を在来の竹子舞による土壁とモルタルで仕上げられ、洋館でありながら在来構法を用いている。さらに玄関をはじめ、窓は引き違い窓となっており、洋館として特徴的な玄関や上げ下げ窓を使用していない。内観のインテリアでは食堂や婦人室は西洋式のイス座の住宅でありながらも鴨居や柱の意匠で和洋の折衷が施され、応接間も「折衷式」と記載し、イス座に合わせた書院と、一段上げた量の空間を設けている。平面は通りから玄関に直接アクセスでき、すぐに応接間、その奥は襖を挟んで食堂と寝室と家族のための空間と続き、導線は短くコンパクトな住宅となっている。階段を上ると2階は「折衷式」の書斎と客間と二の間と続き日本間となっている。

このように最初の葛西の三年町の自邸では洋館でありながら、和洋折衷を意図していることがわかる。外観に関しては葛西は「外観は矢張日本風にして」^{*3}と述べており、和風にするのがよいとしている。また、屋根はスレートを使用しているが屋根形状は寄せ棟屋根をしている。さらに一階部分や通り正面はモルタルで仕上げているが、庭側はガラス面が多い開放

表1 葛西萬司の自邸の建築的特徴

西暦〔和暦〕	作品の竣工と掲載雑誌	外観	平面・構造・内観
1912[M45]	●三年町の自邸 竣工 2月『建築工藝叢誌』（第1巻） 「試験中に興する経済的住宅建築」 1,2階平面図、外観、内観写真、論文		平面：玄関からすぐに応接間。その奥には襖を挟んで食堂と寝室台所や洋館などの水回りがある。2階は階段を上ると応接間。その奥には日本間の客間と二の間。構造：木造二階建て。壁は真壁で構成。内観：1階は洋風で構成。応接間は椅子座でつくられた書院と一段上げた量の空間をもち、折衷式と記している。食堂は和洋折衷で長押し釘隠しのデザイン。2階は和風で構成。書斎は折衷式とし、椅子にも対応。日本は表材のみ種を使用している。
1913[T2] 1916[T15]	●三年町の自邸 再建 10月『住宅』（第1巻第4号） 「私の家に就て」 4月『婦人画報』 「西洋間か日本間か」 『建築写真類聚 第1期 第1玄関』 写真のみ		平面：玄関からすぐに応接間。その奥には襖を挟んで食堂と寝室台所や洋館などの水回りがある。2階は階段を上ると応接間。その奥には日本間の客間と二の間。構造：木造二階建て。壁は真壁で構成。内観：1階は洋風で構成。応接間は椅子座でつくられた書院と一段上げた量の空間をもち、折衷式と記している。食堂は和洋折衷で長押し釘隠しのデザイン。2階は和風で構成。書斎は折衷式とし、椅子にも対応。日本は表材のみ種を使用している。
1918[T7] 1920[T9]	●葛西荘洋館 竣工（岩手県盛岡） 葛西の養父・葛西重雄の邸宅に建てられた。葛西萬司が設計。昭和天皇行幸の際には行在所としてもつかわれた。 『建築写真類聚 第1期 第1玄関』 写真のみ		平面：L字の平面。左は農家の母屋を移築した和館。右側に洋館がある。構造：洋館は1階は煉瓦造。2階は木造。内観：1階は洋風で飾りあげ天井に葛西家の紋章の建紙。
1927[S2]	●中里の自邸 竣工 8月『新建築』（第4巻 第8号） 「展覧会号」 「展覧会「住みよき家の資料の会」 大阪三越にて開催。 葛西は自邸と他、計4作品を出品。 中里の自邸の写真のみ		平面：L字の平面。左は農家の母屋を移築した和館。右側に洋館がある。構造：洋館は1階は煉瓦造。2階は木造。内観：1階は洋風で飾りあげ天井に葛西家の紋章の建紙。

1：日大理工・院（前）・建築, Graduate Student, CST, Nihon-U. 2：日大理工・教員・建築, Professor, CST, Nihon-U

的な立面を和風の建具で構成し、洋館でありながらも和風をベースとしていることがわかる。

三年町の自邸は「試験中に属する建築経済的住宅建築」という題名で『建築工藝叢誌』に掲載されている。題名に「経済」という言葉を入れていることから自邸において「経済」を重視していたことがわかる。これは葛西の最初期の論考「建築の経済に就て」に通ずるもので、建築費の合理的な使用に関して建築家がより関心をもつべきと訴える内容である。本文では建築費を安く抑えるために、構造を節ありの安い杉材を用い、表面に檜の板材を張る、もしくはペンキや壁紙を使用して材料と仕上げるなどの工夫を試験的に行ったことを強調している。葛西は在来構法と近代の技術である壁紙やペンキを導入してローコストな住宅を目指したと考えられる。

三年町の自邸以降、葛西は盛岡に葛西荘洋館と自邸の4作目にあたる中里の自邸を設計している。これらの住宅で共通するのは三年町の自邸での和洋折衷の住宅である。そして1階洋間、2階を日本間とすることである。しかし、三年町の自邸では立面は全体で統一がなされていたが、葛西荘と中里の自邸では内部の和洋の室内の意匠に合わせ、1階を洋風の壁、2階は和建具により和風の立面となり外観を室内意匠により分割する意匠となっている。特に中里の自邸は1階を煉瓦造に上げ下げ窓、インテリアも洋風寄りの意匠となあっているが、2階はこれまでの住宅と同様に和建具のガラス窓に日本間の形式が堅持されている。

葛西の自邸で使用されている椅子は葛西自身による設計とされている。その椅子は直線で構成されたデザインで、肘掛けは両側に備わっている一方で、背もたれがないデザインをしている。これは和服の女性が座った際に和服の帯がつぶれないようにするための工夫であったと考えられる。居間の写真では葛西をはじめ一家がくつろいでいる写真があり、和服の女性が葛西のデザインした椅子に腰掛けている。当主とその家族が椅子に座り集まることは当時ではまだ珍しく葛西が住宅の設計において家族本位の設計を行っていたことを示すものと考えられる。

また日本間における冬季にのみ使用するオイルヒーターは書院の棚に納め、夏季などの使用しない時期には襖をし、見えないようにしている。

2-3. 雑誌や展覧会にみる評価

葛西の一連の自邸作品は『住宅』『婦人画報』などの建築専門家以外の大衆雑誌に掲載されている。三年町の自邸は創刊間もない『住宅』で掲載され、発行元で

ある住宅改良会の創設者であり「あめりか屋」社主の橋口信助の目指す商品住宅として、認められていたと考えられる。特記すべきは葛西の三年町の自邸は『住宅』の創刊よりも4年ほど早い時期に竣工していることであり、かつ「あめりか屋」の一連の作品の特徴である家族本位、和洋折衷、椅子座、家具をもち、商品住宅としてのローコストを目指すなど共通点が多い。また洪洋社の『建築写真類聚』シリーズ『第一期 第一 玄閣』では三年町の自邸の前面道路から、門を設けずアクセスを可能とした玄閣が掲載されている。

中里の自邸は『新建築』1928年8月号「展覧会号」に写真が掲載され、大阪三越を会場に「住みよき家の資料の会」という展覧会に出品している。大阪三越はこの展覧会の3年後の1930[S5]年に大阪・三越住宅建築部を設立し、本格的に中流階級向けの住宅販売を始めている。目録には藤井厚二などの日本人建築家の作品25作品が展示され、葛西は一人当たりの作品数で最多の4作品を展示している。その中には辰野葛西事務所時代の作品も葛西設計として記載されている

3. まとめ

葛西は自邸において、和洋折衷の住宅を在来構法と近代技術を使用し、かつローコストな「経済的」住宅を目指していた。「経済的」住宅とは、葛西の初期論考の「建築経済」の実践である。自邸の建築的特徴は外観を和洋の機能により分離させる試みであり、当時としては新しいデザイン手法である。また「あめりか屋」とも呼応するものである。こうした姿勢が婦人雑誌やデパートでの展覧会に取りあげられた。

謝辞

本稿の執筆にあたり、図面と写真資料の閲覧では葛西肇氏、及び盛岡市先人記念館主任学芸員田崎農巳氏に大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。

参考文献

- [1] 『第49回盛岡市先人記念館企画展 葛西萬司』盛岡市先人記念館. 2013年.
- [2] 森まゆみ『住宅建築』2002年11月号「黎明期の建築家たち 第12回葛西萬司」, 建築資料研究社
- [3] 内田青蔵, 大川三雄, 藤谷陽悦『新版 図説近代日本住宅史』彰国社

図版

図1: 参考文献[1]2頁.

注1) 参考文献[2].

注2) 葛西の関わった作品一覧は1942[S17]年11月の『建築雑誌』及び『日本建築士』に掲載.

注3) 葛西萬司「西洋間か日本間か」『婦人画報』1918. 4月